



からしだね

2019年2月号
(546号)

キリストの受難 カトリック池田教会

主任：ノノイ・プラザ神父

住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL：072-751-2400 FAX：072-753-4624

URL(ホームページ)：<http://www.ne.jp/asahi/catholic/ikeda/church/>



本号の記事の主題など

特別寄稿

第36回百日間連帯共同祈願への招き

デニス神父の追悼ミサ

みんなで祝う日曜学校のクリスマス会

島 基幸神父

みんなの談話室

ベトナム巡礼のめぐみ(後編)

俳句四句

2月の教会カレンダーへの追加

講話のCDをカール記念館一階で貸し出し

始めました

特別寄稿

第36回百日間連帯共同祈願への招き

島 基幸神父

(聖霊による刷新関西委員会主催の百日連続共同祈願担当)

マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。(ルカ 2・19)

主の降誕と新春のお喜びを申し上げます。

皆様には、主の慈しみと恵みに満ちた一年の始まりを思い巡らしておられることと存じます。百日間連帯共同祈願も、去年で35回目を捧げて、一つの節目を迎えています。私自身の身辺にも変化が生じているからです。叙階35周年の昨年は、サバティカル休暇(研修休暇)として、昨年4月から今年の6月までの長期の、考えられないほどのすごく贅沢な期間を与えられたのでした。しかし、人間の思いと神の計らいは異なり、その予定は初めの4か月で終わり、突如として昨年8月15日聖母の被昇天の祝日からミャンマー宣教の調査チームの一員に加えられ、昨年は8月と9月、11月と3回ミャンマーを訪問しました。

昨年8月15日まで、ビルマのこと、ミャンマーという国のことは、知識がなく今まで意識の中になかったのですが、ミャンマー・ミッションの調査チームの一員として調べたことを、10月のローマ総会で発表し、準管区会議でも発表し、わたしがいつの間にかミャンマー宣教の派遣メンバーのリーダーになり、ミャンマーに御受難修道会の修道院や黙想の家を設立し、地元のミャンマー人の御受難会員が生まれるようになるまで、私の人生の最後を捧げることになりました。第二の人生と言ってもいいでしょう。この場でこのように皆様にミャンマー宣教への私の新しい生活を説明するとは夢にも考えもしなかったことでした。

ミャンマーとは、あの「ビルマの豎琴」の舞台になったビルマのことです。ミャンマー連邦共和国と国名に「連邦」と称するように、多言語、多宗教、そして135の民族によって成り立つ国で、伝説によれば、王国はインドのシャカ族の末裔であり、そのことが、仏教を基盤にした王統の正統性を保ってきました。しかしビルマは19世紀(1886年)三度の英緬戦争によって英国の植民地となり王国は滅ぼされました。王家によって庇護された仏教も弱体化し、アイデンティティを失ったのです。19世紀後半から全面的に英国植民地政府の支配下に置かれました。20世紀になって英国式の教育を受けた都市部の中間層を中心にビルマ・ナショナリズムが興隆し、独立機運が高まったこの時、ビルマ

に上陸した日本軍がビルマ人のナショナリズムを利用して傀儡政権を作ろうと暗躍し、アウンサン・チーさんの父アウンサンを取りこんでビルマ独立(義勇)軍(のちの国軍)の成立に影響を与えました。1942年の日本軍上陸から始まる戦争と抗日運動と暴動事件などの争いは1948年1月4日の独立で終わらず、その後も共産党との闘い、中国国民党との闘い、カレン族との闘い、そしてなお他の少数民族との衝突を繰り返しました。歴史上もつとも長い市民戦争と評される70年間の紛争の火種は日本人と無関係ではないことも(「物語ビルマの歴史」根本敬著 参照)、11月に訪問して私の知るところとなりました。

ミャウンミヤの街の小教区を訪問した時のことです。1965年建立の立派な聖堂と小教区司祭館、2年制のカテキスタ学校と修道会の寮がありました。そこに古いレンガ造りの建物があり、司祭・修道者と141名の学生が殺された場所ですと案内されました。1942年のことだと説明を受けました。なんの知識もなかったのがどういうことなのか調べました。その事件は、ネットで調べて、ミャウンミヤ事件と関係があることが分かりました(池田一人『日本占領期ビルマにおけるカレン＝タキン関係—ミャウンミヤ事件と抗日蜂起をめぐって』(Monograph Series No.11)上智大学アジア研究所、2012)。ミャンマー司教協議会は、2015年キリスト教伝来500年を記念してミャンマーのキリスト教の歴史をまとめて記念出版しました。主にビルマに到来した宣教会の宣教歴史が掲載されていて、その事件については、カトリック教会との関連で当時の証言が記載されています。

そこには、水田が広がる静かなミャウンミヤの農村で、1942年ビルマ族がカレン族を襲い両者間で激しい暴動が起こり、その煽りで、二人のカレン族出身のカトリック司祭と二人のシスター、そして141名の学生がビルマ人主体の独立義勇軍に虐殺されたこと、同じカレン族のプロテスタントの牧師が武装闘争を呼びかけ、司教がそれに応じないように指示したので、村人に武器を放棄するようにと説得した二人のミラノ会のイタリア人宣教師が牧師によって殺されたりしたことが記載されていました。しかも、前掲の記事によれば、その発端は、日本軍の鈴木敬司大佐が部下の一人が殺害さ



れたため、怒りをもって焼き討ちを命じたことから始まったのです。一人の日本人の命令がこの国の不幸の元凶と考えられるのです。新しい社会主義の道を目指した政権はすぐに経済的に破綻し、政治的混乱のうちに1962年3月2日軍事クーデターが起こり、ネイウン軍事独裁政治が始まりました。1965年には教会財産の没収と病院と学校の国有化、そして1966年には宣教師の国外退去が決定し、戦前からいる宣教師以外はすべて国外に追放されました。鎖国政策をとった軍事政権は経済的に破綻し、国民の民主化運動の高まりで、ネイウン大統領は辞職し、1988年には国民総選挙が行われアウンサンスーチーが民主化運動の旗手として脚光を浴びました。その後は軍事独裁政権が民主化運動に介入して皆さんのご存知のように彼女が自宅軟禁から解放されたのは2011年新政権が発足して後のことです。国政選挙に勝っても、国家最高顧問になっても背後に国軍が力を持っていて自由がないので民主化やロヒンギヤの人権問題などまだまだ国際社会復帰に時間がかかると推測します。

新春の明るい喜びの時に、こんな暗い話を持ち込んでと叱られるかもしれませんが、現在のミャンマーの教会の現状を理解するためには、歴史をもとにその背景を物語るのがよいと思いました。私自身もなぜ主がここに呼ばれるのかを語りながら、皆様にも理解していただきたいと考えるからです。

私たち御受難会が招かれたパセイン教区は、エーヤワディー川の河口に広がる下デルタ地区の中心都市パセイン市に司教館と聖ペトロ大聖堂カテドラルがあります。パセイン市までは、ヤンゴン(ラングーン)市から西南方向にデルタ地区を横断す

る一本道の幹線道路を走るバスの交通機関しかなく、5時間ほどの道の程のほとんどは水田風景が続きます。(つい最近、2018年12月末から空軍基地の飛行場に国内線が就航しました。片道55ドルで週三便、所要時間50分)途中ドライブインで30分の休憩があります。ほぼエイヤワーディ川のデルタ地区の3分の2を占める広い教区です。ヤンゴン教区から分かれて68年、信徒6万人(長崎と同じ)、司祭110名、小教区36、女子修道会3、男子修道会2、カテキスタ学校、小神学校の他に孤児院や寄宿舎などが多数あります。2008年のサイクロン(ナジル)で死者13万人、避難民240万人の被害のあった地区です。この時の教会の社会活動によって青年たちの目が開かれ、青年たちの社会奉仕活動が盛んです。もちろん召命もあります。小神学生40名、大神学生20名と多いのですが、以前より少なくなったと担当司祭は嘆いていました。国全体は先進国に経済封鎖されているため、青年たちに地元の就職先がなく、この地区からはタイの工業地帯へ集団就職しているので、二人の司祭と数名のシスターが移住担当として青年たちに同伴しています。

教区のヨハネ司教様は、カレン族出身で日本人とそっくりな顔立ちで、聡明で包容力があり、とても心配りが上手で優しい方です。教区司牧5年計画を実施し、信者の信仰生活をレベルアップしたいと願って、国際修道会を教区へと招かれたのです。ヤンゴンには国際修道会は男女修道会を合わせて43あり、御受難会は44番目になります。70年代、80年代はカレン族との部族紛争問題で政府がパセインを外国人立ち入り禁止地区にしていたこともあり、国際修道会は一つもなく、御受難会が唯一その誘いに応えたのです。学校で教えるためイエズス会やPIME(ミラノ会)は、ヤンゴンから通ってきます。政府は宗教施設の新たな建設は禁じており、まして宣教師にはビザを発給しない方針です。現在は観光ビザ(28日間滞在)しか取れないので、三回日本とミャンマーを往復しました。就労ビザで多くの宣教師はいま潜伏しています。就労ビザは70日、半年、一年と度重なると、長期のビザが取得できる仕組みになっています。宗教ビザは仏教寺院での黙想のためだけです。教育ビザは政府系の学校で教えるのが前提です。観光ビザは、ホテルに宿泊することが条件です。私はホテルではなく教会に泊まったために、追跡調査され、担当司祭が三度も入管

に呼び出され釈明を求められたとのこと。すべて入管は私の行動を把握していたと司祭は、驚いていました。相手は私が司祭であることを把握しているの、就労ビザは難しいのですが、日本語の教師ということで雇用されるのは問題ないので、日本でもYBU(善き牧者運動)のハヤット神父やマクドナルド神父などが英会話学校で宣教活動を始めたように、私も日本語教師になる決意をしました。今、日本語教育能力検定試験を受けるために準備を始めました。嘘はすぐばれるので、本当に資格を持つことが必要なのです。実際、これからの日本の教会へはアジアの宣教師たちが技術労働者とその家族の増加に伴って来日するであろうし、また家族ぐるみで教会に来る時に、信者も、実際に役に立つように支援の技術を身に着ける必要があるでしょう。そして、日本語はその一番必要なもののひとつと考えました。

パセイン教区のカテドラルは、ペトロ大聖堂で1872年に建てられた立派な教会堂です。毎朝のミサには、ヨハネ学校の寄宿生男女150名が参加し、聖フランシスコ・ザビエル修道女会のシスターたちも30名近く参加します。ここの典礼は、土日がビルマ語、月曜日が英語、火曜日がボ・カレン語、水曜日がスゴー・カレン語、そして木曜日がラテン語のミサです。金曜日は再びボ・カレン語で行われます。英語であれ、ラテン語であれ、会衆はちゃんと応答しているので、どの言語でも同じように式文を覚えているようです。日曜日にミサを共同司式すると、ミサ奉納金が5,000チャット配分されます。司祭には給与がないので、ミサだけが頼りです。日本の感覚では5,000円の値打ちのようですが、為替レートで換算するには、10か14で割ればよく、500円か350円くらいの金額になります。100回のミサをお願いしても、5万円にしかなりません。中国系のミャンマー人に依頼されたときは、10,000チャットでした。10,000チャットも日本円にすると、714円です。10で割れば、1,000円ですが。公務員の給与が15,000円位です。14掛ければ210,000チャットです。5,000チャットは、学生にアルバイトを頼むときの一日の日当です。青年担当司祭のキャンプ地を訪問しました。彼の場所は夏のキャンプに使われていますが、施設が古くとも傷んでいて、わたしも夜寝るのがはばかるような場所でした。こんなところに青年たちが喜んでくるのかと尋ねると、以前は周りに信者の共同体があつてたくさんの助け手がいって建物も維持できたし、ミサにも

たくさんの献金があつたが、今はミサを頼む信者は誰もいない。紛争地だったので、政府が村人を強制移住させたのだということです。代わりに仏教徒が周りに住んでいるとのこと。私は自分の持ち合わせのお金をすべて差し出して、これでミサを20回お願いしますと頼みました。村々を訪ねていろんな施設で宿泊しました。のみとダニと小さな蟻に悩まされました。蚊もいます。蚊帳があるのでこれは何とか防げるのです。

一見のどかで自然に満ち溢れる田舎の風景の中に、あちらこちらで生活苦に苦しむ人々の姿が目の前を通り過ぎます。国民人口の10%が出稼ぎに国外に出て、残された家族に送金しています。知れば知るほど胸が痛みます。1月15日にミャンマーに行き、途中でベトナムへ行き、それからまたミャンマーへ戻り、また28日間になる前に、戻ります。そしてまた出発です。百日の共同祈願のミサが毎日できません。できても、共同司式です。それも英語であれば、何とか声を出すことができますが、ずっと沈黙です。日本語でするミサは、わたしの力の源です。皆様と一緒にミサを捧げることほどうれしく喜びを感じます。そのミサをわたしはすることができません。宣教師の痛みは、やはり自国の言葉で神を賛美することができないことでしょう。しかし、いつか外国語のミサが異言で祈るように主の臨在と喜びを味わうミサとなりますように願っています。百日共同祈願の祈りを再び捧げますが、今度は新しいミッションの上に聖霊の豊かな注ぎをお祈りください。

私は、パセインのジョン司教様に100日共同祈願ミサをお願いします。きっと、教区の100人の司祭に分割するか、ミサ依頼の少ない司祭に分配することでしょう。困難な中でも信仰を守ってきた司祭たちの祈りが、皆様の願いを主に届けてくださるでしょう。御受難修道女会のシスターたちも協力して、祭壇にささげられた皆様の共同祈願のカードの束を囲んで毎日祈ってください。

さて、神の御心を求めて、この長い手紙を書いているうちに、浮かんで来たことは、一人の日本人によってなされた犯罪が、この国の元凶であるということです。そして、この方の罪のあがないのために日本人の御受難会員である私が名指して呼ばれたのだとわかってきました。この方は、ビルマ連邦共和国政府から独立の恩人として感謝状を受け、そして日本に帰ってからは、戦争犯罪人として罰せられることもなく、飢餓状態の

日本の救世主のようにビルマ政府と交渉して大量の外米を仕入れて日本政府からも感謝されたのです。しかし、この方の罪は神の目の前にあります。心静かに平和に永眠されたのですが、戦争中とはいえ、非戦闘員の女性や子供の住まいを襲い、村を焼き払ったのです。彼の悪はミャンマー国軍に浸透し、その悪が孕み、毒を生み出し、それは今日のロヒンギャの民族虐殺事件にまで連鎖と続きます。きっと安らかな眠りではないでしょう。こう考えるのは私の思いすぎかもしれません。御受難会がミャンマーに行くのは会員が減少したので補充のために召命を探すという理由は、神の思いではありません。その理由ではなく、御受難会のカリスマそれ自身のため、行かねばならないのです。つまり、十字架の主のあがないの記念、神の愛を思い起こし、悔い改めと罪のゆるしのために遣わされるのです。日本人がこの国で犯した罪のあがないのために祈らなければなりません。主はこの国のいやしとゆるし、和解の恵みを実現するために御受難会をお呼びになったのです。これが私たちの存在理由、主の望みにかなった意向です。このために私の命が短くなっても、また困難な長い道のりとなっても、主のためにわたしの残り少ない命を会に手渡すことは、修道誓願の完成の道であり、新たな使命への派遣なのです。

気持ちが高ぶってきました。静かに、そしてゆっくりと前に向かって歩みましょう。

今回の百日は、主の洗礼の翌日1月14日（関西委員会）から始めて復活祭三日目4月23日までを祈りの日と決めました。日本とミャンマーの教会への聖霊の注ぎと祝福を求めて、教会が和解の

使者となれるように祈りましょう。（下記参照）。私は、彼の地の戦没者のためにも祈ります。

わたしの新春の決意を聞いていただきありがとうございました。

2019年1月7日 主の公現の祭日に

PS：昨年北海道地震のために、札幌教区へ15万円を寄付させていただきました。

（共同祈願ミサ意向の葉書）

第36回百日間連帯共同祈願ミサの

1月14日 ~ 4月23日

命の与え主、聖霊、来てください。

主のあがないの業を思い起こして祈りましょう。

- 1.
- 2.
- 3.

「三時に、特に罪人のために私のあわれみを願ひ、そしてほんの短い間でも、わたしの受難、特に死ぬ時の私の孤独について黙想しなさい。この時間は、全世界のための偉大ないつくしみの時間なのだ。あなたに、わたしの致命的な悲しみを悟らせる。この時間に、私の受難のゆえに私に願う人々に対してわたしは何一つ断ることがない」（ファスティナ日記1320）

主イエス、あなたに信頼します。アーメン。
執り成し賛同者 _____

デニス神父様の追悼ミサ

主の洗礼の主日、1月13日にデニス・マックゴワン神父様の追悼ミサが、ノイ神父様と畠神父様の共同司式により、行われました。

デニス神父様がケンタッキー州ルイビルで帰天なさったのは、昨年1月16日でした。あの日からいつのまにか、1年が過ぎてしまいました。ノイ神父様は池田教会のために尽くされたデニス神父様が神の御許で安らかに憩われていますように、またデニス神父様が私たちのために祈ってくださいますように、と祈られました。共同祈願のさいに、デニス神父様の教えを受けた子供たちの代表3人がそれぞれの祈りを捧げました。

私たちがデニス神父様の笑顔やお言葉を思い浮かべながら、祈りました。



みんなで祝う日曜学校のクリスマス会

12月16日のクリスマス会にはたくさんのご参加を頂き、ありがとうございました。

当日はノイ神父様のお祈りから始まり、小さな子どもたちの歌や霊名当てクイズ、初聖体クラスの手作り紙芝居の朗読、3～6年生のオラトリオ「灰色の子羊」など、日曜学校の子どもたちが頑張って練習した成果を皆さまに見て頂きました。恒例の中高生の英語による聖書朗読では、個性的な自己紹介にみんな大笑い。後半にはノイ神父様も一曲歌ってくださり、サンタも登場してプレゼントを頂いた後、みんなでホットドックの昼食となりました。

日曜学校では毎年、11月に入ってすぐにクリスマス会の練習を始めます。実はこの時期は何かと忙しく、リーダーたちも練習の時間を取るのが大変です。それでも子どもたちが限られた時間の中で一生懸命取り組み、イエス様の誕生の喜びを皆さんと分かち合うことが出来るのは素晴らしいことだと思います。また、子どもたち一人ひとりを皆さんに知っていただく良い機会になっていることも嬉しく思います。これからも子どもたちに関心を寄せていただき、声をかけてあげてください。よろしくお願いします。

日曜学校サポーター R.M.



2月のガラスケースのことば

常に喜べ 絶えず祈れ どんな事にも感謝せよ

1 テサロニケ 5・16～18

みんなの談話室

ベトナム巡礼のめぐみ(先月号からの続き)

Y.N.

ベトナム北部に位置するブイチュ教区カテドラル脇に、大きな孤児院がある。ここは訪問目的の一つだった。院長の神父様とシスターたちに守られて百人ほどの子供たちが暮らしている。風通しのよい部屋で、乳児から中学生ぐらいまでの子供たちが眠っていたり、踊っていたり、遊んでいた。もちろん、障害を持った子供たちもいる。手足の不自由な女の子が、口に筆をくわえて、絵を描いていた。しかしどの子供も穏やかな表情をしていた。笑顔だった。つらい経験をした子供もいただろうに、今は神様に守られて、心も体ものびやかに成長しているように感じられた。



どんな社会でも、助けの必要な人はいる。親を失った子供、災害にあった人たち、仕事のない人たち、住む家のない人たちがいる。日本でもベトナムでも、助けを求めている人たちが常にいる。そういう人々に心を寄せ、声をかけ、手を差し伸べるとき、わたしたちの信じる神様がそこにいるのではないかと、孤児院で子供たちと一緒に食事をしながら思った。



和越神父様の家の近くの教会

その日の夕方、和越神父様の実家へ着いた。ご両親を初めとして、大勢の兄弟姉妹、親戚が集まり、手料理を食べきれないほど用意して待っていてくださった。歓迎の宴が開かれる前に、すぐ近くの教会へ向かった。教会の鐘が響き渡り、大勢の住民がミサに集まってきた。ミサが始まる前、何人かの女性たちが独特の節回しで、甘く甲高い声を響かせて祈り続けている。何十人もの子供たちが信徒席を埋めていく。朗読を担当するのは、アオザイで正装した若い女性である。聖歌隊も吹奏楽付きで声を張り上げる。和越神父様は今日のためにあつらえた金色に輝く祭服で、恩師の神父様、主任司祭とともにミサをあげられた。和越神父様の故郷、ナムディンでは信仰は生きていた。生活と密着していた。教会がそこかしこにそびえ立ち、教会関係の製品を作る作業所や店が教会を囲んでいる。信仰が人々の生活に組み込まれていた。夜も更けて、ご両親のお宅を辞するとき、お年寄りの女性が私の両腕をつかみ、満面の笑みを浮かべ、ベトナム語で早口に話しかけて名残を惜しんでくださった。目と目の会話。笑顔のやり取り。

5日目の朝、和越神父様が今日のミサを楽しみにしていてね、といたずらっぽく言われた。午後、聖母出現の地、ラヴァンを訪れた。カトリック教徒の迫害が強まった時期の1788年、ラヴァンの山中へ逃げ込んだ信徒の前に聖母マリアが現れた。病気と飢えで苦しむ信徒たちに、この種類の木の葉を食べなさい、と仰せになった。その葉を取って食べたおかげで、信徒たちは生き延びたと信じられている。聖母出現の奇跡をたたえるラヴァンの教会で、なんと今夕は、ベトナム人殉教者列聖30周年の閉年記念ミサがとり行われるという。私たちは広い野外地場へ向かった。見渡す限り、椅子席が作られている。中央通路の両側に整然と並ぶ中高生の拍手を受けながら、ずんずんと前へ進む。中央最前列まで進んで着席した。私たちより外側の席には数百人のシスターがすでに座っている。現地の人たちはさらに外側の立見席だ。正面には派手な電飾をほどこした、御子を抱く聖母マリア像。ミサが始まった。花をあふれんばかりに盛った菅笠を捧げ持つアオザイ姿の乙女たちが、中央通路から祭壇へ向かう。次はやはり花を手に持つ宮廷服ふうの青年たち。さらにえんえんと続く

次ページへつづく

黒服の神学生の列。そのあとは数えきれないほどの神父様がた。和越神父様もその中にいる。最後に天蓋を差し掛けられた司教様8人が祭壇に着かれた。まさに度肝を抜く一大ページェントだ。会場を埋め尽くすベトナム人信者さんに混じってお祝いのミサに参列させていただき、感激もひとしおだった。



ベトナムのカトリックは若い人々が多くて、活発に機能しているように見えたが、ベトナム全体を見渡せば、社会主義国の共産主義体制であり、カトリック信者は全体の一割程度にとどまっている。政治的主張をしないかぎり、政府からの弾圧はなく、信仰を守っていけるようだ。しかし、これからベトナムは発展していくだろう。田舎にまで物質文明がさらに浸透していったときが、ほんとうの勝負どころかもしれない。ベトナムについて知るきっかけを与えてくれ、信仰についても考えさせられる、めぐみに満ちた巡礼であった。

(完)

表紙の写真について

ミャンマーのパセイン市にある、聖ペトロ大聖堂カテドラルです。畠神父様が宣教のために働いておられるパセイン教区にあります。

写真は畠 基幸神父が撮影。

2月の教会カレンダー - の追加

- 2月3、10、17、24日(日) 13:00~14:30
信仰入門
- 2月7、14、21、28日(木) 10:30
聖書百週間
- 2月8、22日(金) 14:00~16:00
福音書を学ぶ会

黙想会の講話CD



カール記念館一階ホールにて貸し出し中。
広報委員会



リアクリステイナ

寒月や埋め立てに突く珊瑚ジゴン

初春を完走髪をなびかせて

テレジア

いろは覚え拾い読みする子の歌留多

視線はや的を射抜けり弓始



編集後記

平成最後の年が幕をあげた。この30年をふり返る。バブルとその崩壊、直後に日本を襲った金融パニック、阪神大震災、オウム関連事件、ながい不況……。どうもいいニュースが浮かびにくい。みなさんはいかがですか。そんななかで印象に残ったのは「戦争がなくてよかった」と語った今上陛下の姿だった。涙声だったようである。おもえば明治、大正、昭和と戦争犠牲者は絶えることがなかった。平成には戦死した日本人はいなかったのである。快挙。きたる新しい時代でも平和を守らねばならない。

直